『村上春樹と夏目漱石――二人の国民作家が描いた〈日本〉』

柴田勝二著

祥伝社新書 二〇一一年七月

日本で生まれ育ち、一定の教育を受けた者の中で「夏目漱石」の名を知らないものはおそらく存在しないだろう。そして日本国内のみならず、日本文化に興味がある世界中の人の中で「村上春樹」という名を聞いたことがない人もあまりいないだろう。「夏目漱石」と「村上春樹」というタイトルを彩った二人の名前は、近現代日本文学史を彩った数多くの作家の中で、近代の始まりと戦後という二つの区切りを設け、それぞれの時代を代表する作家を一人ずつ取り上げようとするとき最初に思い浮かんでくる二人と言っても過言ではないはずだ。そしてその背景には、それぞれが自ら生きていた日本という〈現在〉を、当然終結した形ではなく現在進行形としてその時代の中で捉えようと試みていた、という共通点が存在するという着想が本書の基調を成している。

このような着想は、著者の講演などでその肉声を通して聞く機会も少なからずあり、著者を知る人には親しみのある内容であるが、著者本人があとがきで語っているように、漱石と春樹を一冊に纏め上げて論じた著書は意外にも本書が初めてである。そして、その執筆の方向が著者のかつて漱石や春樹を取り上げて書いたものとは大きく異なるのにまず注目せざるを得ない。

私が著者の本に接したのは今回が初めてではなく、『漱石のなかの〈帝国〉』（翰林書房）や『中上健次と村上春樹』（東京外国語大学出版会）などで慣れ親しんでいるはずであったが、まずページを開いて数行読んでいくうち、本書のあまりにも易しく書かれた文体を目にし、驚かざるを得なかったのだ。今までの著者のほかの著書は徹底した研究書籍であり、その読者層がほぼ日本文学研究者や近代文学に深い知識を持つものに限定されるものであった。それに対して、本書は漱石や春樹が、小説という一般にもっとも親しまれやすい形を通して彼らが見た日本像を描き出している如く、新書の性格を最大限に活用させて漱石や春樹の文学観を説明しているのが印象的であった。パソコンやケータイ文学の発達で本をあまり読まなくなった現代の読者において、漱石や春樹はその名前こそ知らない人はいないにしても、実際の作品においてはどれほど幅広く読まれているか、また作品に内在されている真意は伝わっているか疑わしい側面があると思われる。本書は漱石と春樹の文学観に結びつく作品を取り上げる際において、核心をきちんと押さえながらも決して延々と伸ばされることのない方法で読者に漱石や春樹の作品のイメージを伝えようと努めている。そして読者がつかみ始めた物語の全体像を基に、その世界の根底を貫いている二作家の世界観を説明し、たとえ実際漱石や春樹の作品を読んだことはないが、二人の世界について興味を持つ読者が本書を手にとって読んだときにも内容が理解できるように細心の配慮が配られていることが特徴的である。

しかし、一般に読まれやすい形式で書かれていることが必ず

しも〈一般論〉的観点から書かれていることを意味することではない。著者が明かしている如く、漱石文学については「近代的自我」の探求という主体性を重視する論調が普通であり、春樹の世界観は社会に背を向けた個人の姿というところに焦点が当てられることが多いが、本書はそういった作法が使われているのは「日本」の姿を「描くための方法的な主題性であ」るとはっきり方向性を示し、その示された方向から足を踏み外すことなく二人の国民作家の世界観を解説している。

本書の企図が既存の著書の「エッセンス的な部分の抽出」と「両者を結ぶものを浮かび上がらせ」るという著者の話通り、漱石や春樹に対する全体的な論説は『漱石のなかの〈帝国〉』や『中上健次と村上春樹』でのそれから大きく変わるものはない。しかし、本書の特に注目すべき点は、春樹の最新刊である『1Q84』を取り上げているところにある。

漱石や春樹の描いた「日本」を把握していく過程で、まだ発売されて間もない『1Q84』をあえて取り上げた理由は何だろうか。新書というジャンル上、春樹の最新刊に対する一般読者の興味への配慮とも読み取れる側面もあるかもしれないし、『1Q84』を執筆する際に当たって影響を及ぼしたと思われる父の死、そしてそれを反映してかその描かれた世界から「時代や歴史に関する批評性」が希薄になっていることによる、春樹の「国民作家」からの離脱を懸念する著者の気持ちから『1Q84』を取り上げているかもしれない。

面白いのは、この『1Q84』を語るという試みが、著者が指摘している漱石や春樹の〈自分が所属した時代の流れを捉える作家〉としての特徴と類似しているものであるという側面だ。村上春樹とその小説世界というものは、今進行中であるひとつの〈時代〉に例えられるものとも言えよう。そして本書に取り上げられた『1Q84』自体がBOOK3で話の結末がついたかのように思われる側面があるものの、一月―三月が不在しているままであることや未解決な謎が相変わらず存在しているところから、〈未完結〉な、〈現在進行形〉のものである可能性が十分考えられる。著者がこの事実に気づいていないはずはもちろんないのであり、それにもかかわらずこの進行中である春樹の『1Q84』という〈時代〉をあえて取り上げ、そこで覗かせている変質の可能性を、漱石が日露戦争以降目まぐるしく変わっていく「日本」という近代国家に向けた眼差しの如く、また春樹が六十―七十年代という激変の時代をその時代の中で眺めようとしたように、著者は捉えようとしているのである。そしてこの側面こそ、著者の既存の著書とは異なる本書の持つ大きなポイントであり、価値であると言えよう。

（朴翰彬）